九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

太宰治作品の漢訳 : 章克標を中心に

劉, 金宝
九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士課程

https://doi.org/10.15017/1518001

出版情報 : Comparatio. 18, pp.16-27, 2014-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン :
権利関係 :

太宰治作品の漢訳―章克標を中心に―

劉　金宝

はじめに

「竹青」と「惜別」は何れも中国人に読んでもらうために書いたものである。「創作年表」の昭和二十年の正月の項に「小説（漢文／竹青）大東亜文学　三〇」、四月の項に「小説（和文／竹青）文芸　三〇」とある（注一）。つまり、「竹青」は『文芸』への発表に先立って、昭和二十年一月、「漢訳「竹青」を、華語文芸雑誌「大東亜文学」（電報通信社刊、発行日未詳）に発表」（注二）したことになっている。ところで、相馬正一は「幻の漢訳「竹青」について」において、『文芸』に発表した「竹青」の末尾における「自注。これは、創作である。支那のひとたちに読んでもらひたくて書いた。漢訳せられる筈である」という太宰治の注記を根拠として、『文芸』四月号掲載原稿として「竹青」を編集部に届けた時点では、まだ漢訳が発表されていなかった（注三）と指摘している。

一方、周海林は「日本文学報国会は「大東亜文学」第三号の原稿を太宰治にも依頼していた。彼の「惜別」は実はその依頼によって書かれたものだったようである」（注四）と述べている。本稿では、「竹青」や「惜別」などの太宰治作品の漢訳について述べてみたい。

一、幻の漢訳

まず「竹青」と「惜別」の掲載（予定）雑誌『大東亜文学』について述べたい。

①『大東亜文学』の成立

『大東亜文学』の成立は一九四三年八月に、東京で開かれた第二回大東亜文学者大会まで遡ることができる。第二回大東亜文学者大会で中国代表の陶亢徳はつぎのように発言している。

就中日華両国間の事を論じますならば、中国は事変前までの間に日本文学の紹介に就て相当の努力をした為に、日華文学は恰度影の形に添ふやうなものでありまして、お互いに相離れることの出来ない関係にありましたけれども、事変勃発以降は、それを継続する人はゐなくなつたわけでございまして、今日のやうに文化交流を唱へる真最中に在りましても、日本文学の紹介や訳述につきましては、甚だ遺憾ながら昔の盛況に及ばないのでございます。文学上非常に密接な関係を持つてゐる日本に対してさへこんな状態でありますから、東亜のその他の民族、文学に対する認識は、いかに不足してゐるかはお察しができることであらうと存じます。

これを逆に申しますれば、東亜各民族は現在の中国民族に対する認識も恐らく足らないでせうと思ふのでございます。こんなに理解の不足な各民族から同心協力東亜建設を求めるのに幾倍かの苦労を要するのも無理のないところでございませう。以

上の理由を持ちまして、東亜各国間には、同様の内容を有つ東亜文学定期雑誌の発行を必要と感じまして、この動議を出しましたわけでその具体的の方法につきましては、次のやうに申し上げたいのでございます。

その名称を仮に『大東亜文学第何巻』といふふうに付けたいと存じます。それからその内容に至りましては、東亜各国間に於ける最もその国の生活、思想を能く表現したところの作品を紹介し翻訳することがこの内容でございます。それから組織を申し上げますと、東京に於きまして、総編訳所といふものを置いて、さうして東亜共栄圏内の各国が推薦いたしました傑作をそこで引請けまして、日本語にそれを翻訳して後、各国に送ることゝいたし、各国も翻訳部といふものを設けまして、その東京の総編訳部から送付の原稿を自国の文章に訳しましてこれを発行することにいたしたいと存じます。

それから最後に経費の問題でありますが、経費は各国の文芸団体が之を負担いたします。或ひはその政府の補助を受けるやうにいたしたいと存じます。以上が私の申し上げたい希望でございます。(注五)

この陶亢徳の発言の後に引き続き、満洲代表の山田清三郎は

大東亜文学者大会もすでに二回を開催し、将来も更に続けて戴くことと存じますがこの大会の成果を大会だけのものたらしめることなく、恒常的にも之を生かしてゆきたい。かういふ意味におきまして定期刊行物といふものは絶対に必要だと存するのであります。陶先生が具体的に仰しやいましたやうに『大東亜文学』といふやうなものを発行いたしまして、広く各地各国からの優秀な作品を選択して発表し、同時に各地各国の文学運動の情況を月々集録いたしまして相互の提携と交換をなし、また傍ら親睦の促進機関とすることができれば非常に幸だと思ひます。各地各国に編纂委員会を設けまして東京に本部を置いてやつて戴きたいと思ふのであります。

この雑誌は将来更に大東亜文学者協会連盟とか、或ひは何かさういつた大東亜の文学団体の大同団結の一つの母体ともなるだらうと、我々は期待してゐる次第であります。何卒皆さんの御賛成によつて、これが速やかに発刊を実現させて戴きたいと存じます。(注六)

と述べている。両氏の提案に対して、日本代表の河上徹太郎は

この問題は仰せの通り非常に大事な問題でありまして、ぜひ実現させたい、いや今まで実現されなかつたのが非常に遅かつたことを私は感じてゐる次第であります。兎もあれ、早速にこれに着手する方法としまして、私は、現在満洲国、中国にあります各文学雑誌の編輯機関が、つねに密接な関連をとること、それをいたしますれば、夫夫の傑作が相互に翻訳交換されることは非常に容易になるだらうと存じます。

現に今回見えました代表の方々でも、日本では大体文学報国

会を主といたしまして、満洲国では山田清三郎さん、また北京では沈啓無先生、柳龍光先生の夫夫の雑誌、また蒙疆では石塚さん、赤塚さんの『蒙疆文学』それから上海では柳雨生君のやつてをります『風雨談』さういふやうな雑誌社の代表的な方が集つてゐますので、この会議の席上でなくても、皆さんお帰りになるまでに充分連絡の相談はできると思ひます。

これは早速の具体案でありますが、その次に特に陶先生の仰しやつたやうな本格的な各国文学の交流雑誌を発刊すること、これは非常に大事なことで、我々も充分考へておかうと思ひます。(注七)

と述べ、同様の考え方を持っていたことがわかる。このように、各国文学者は『大東亜文学』創刊にほぼ一致した考えを示した。後の昭和十九年九月一日発行の「文学報国」第三十四号において、「華文文芸雑誌『大東亜文学』創刊—堂々たる編輯内容—」の見出しで、

本会発行事業の一たる満洲、中国向華文文芸雑誌(月刊)『大東亜文学』は、大東亜文学者大会の刺戟により中国平和地区に起こりつゝある新文学運動を助成善導し、対重慶牽制の知識層工作を活発に推進するため之が最上の武器としてかねてより待望さるゝところであつたが、今や諸般の準備全く成り左の如き堂々たる内容を以て、愈々その創刊号の発刊を見るに至つた。

(中略)尚創刊号は十月初旬現地に於て発売されるが、次号(十一月号)の内容も既に整へられてゐる、発行所は電報通信社。(注八)

というような『大東亜文学』の創刊に関する記事が見える。

②『大東亜文学』の内容

次に、その内容を確認して見たい。

第一号(昭和十九年十一月一日印刷/昭和十九年十一月一日発行/発行所・日本電報通信社)

「発刊の辞」中村武羅夫

小説と紀行文…「旅人」佐藤春夫

「本朝名笛傳」白井喬二

「在上海」冨澤有為男

随筆…「光琳与宗達」武者小路実篤

「周作人先生論」一戸務

「昭南所見」井伏鱒二

論文…「中日文芸談」増田渉

「依学界而樹立的日華提携」石田幹之助

「対於岡倉天心的回憶」浅野晃

紹介…「於中国内地探検的書籍」稲垣史生

「文芸短訊・拉雑談」常関堂

「書評」常関堂

「編輯後記」編輯室

第二号（昭和十九年十一月二十五日印刷／昭和十九年十二月一日発行／発行所・日本電報通信社）

小説…「冷凍人体」井伏鱒二
「不動心」土師清二

詩歌…「旗・大兵」蔵原伸二郎

随筆…「中臣祓」上司小剣
「嘗遊地」佐藤春夫
「仰光新秋」小田嶽夫
「日本庭園」小寺駿吉
「唐詩雑抄」小杉放庵
「大東亜音楽之世界的優秀性」田辺尚雄
「文学与道徳」山本健吉
「表現在近代日本文学上的日本的伝統」塩田良平

論文…「儒林外史之日本訳完成」常関堂
「文芸家拉雑談・文芸短訊」常関堂
「編輯後記」編輯室

上記の目次を参照して見ると分かるように、太宰治の「竹青」と「惜別」はいずれも見られない。一方、第三号以降の『大東亜文学』は中国においても、日本においても見つからないので、「竹青」と「惜別」の漢訳はまだ不明のままである。相馬正一の話を借りて言えば、何れも「幻の漢訳」作品である。

二、実際の漢訳

「竹青」と「惜別」は太宰治が作家としての名声を中国の読者へ伝えようとするため、工夫しながら創作したものであるが、実際に中国語に翻訳されたかどうかはまだ分からない。では、太宰治の作品は何時から、誰に、中国語に翻訳されたか、という問題が沸いてくるであろう。これについて考察して見たい。

管見に入ったかぎり、一九四二年一月発行の雑誌『訳叢』（第三巻第一期）に、章克標（周囲の批判から家族と自身を守るため、許竹園という偽名を用いた）による太宰の「きりぎりす」の漢訳である「蟋蟀」が掲載されている。この「蟋蟀」は太宰治作品の漢訳の嚆矢ではないかと推測される。

①雑誌『訳叢』

『訳叢』は、南京中日文化協会（一九四〇年七月創立）の機関紙として一九四一年二月に創刊され一九四四年六月に停刊。編訳及び発行は中日文化協会訳叢月刊編訳委員会、発売は上海中華日報館と中央書報発行所。「総編訳」すなわち編集長は九州大学卒の広東人郭秀峰で、（中略）毎号の内容はその大半が『改造』『日本評論』等日本の雑誌からの翻訳転載であり、その発行日付からみて、遅くとも一ヶ月ほどのちにはすぐさま時事的時局的な文章の翻訳がされていることがわかる。翻訳文学作品の初出は明記されていないが、その多くがやはり同時期の総合雑誌、文芸雑誌から選ばれている。（注九）

②訳者の章克標

○生い立ち

章克標（一九〇〇年―二〇〇七年）は作家、日本文学翻訳家で、浙江海寧に生まれ、一九一八年、来日、東亜高等予備学校で日本語を勉強した後、翌年の四月、官費留学生として東京高等師範学校数学科に入学した。一九二六年六月、中国に帰り、国立・南大学を始め、幾つかの学校を転転して、教鞭を取った。一九二七年、騰固らの同人と、獅吼社を結成し、『獅吼』、『金屋月刊』などの雑誌を創刊した。雑誌の編集をしながら、文学創作に携わる、所謂兼業作家として活躍した。日中戦争中、汪兆銘による偽国民政府の宣伝部に勤めたので、後に問題視されてきた。一九四三年八月、中国代表として第二回大東亜文学者大会に参加して、翻訳機関の設置を提案した。

作品に「文壇登龍術」をはじめ、「銀蛇」、「恋愛四象」、「蜃楼」などが数えられる。作風は谷崎潤一郎の耽美主義から多大な影響を受けたようである。特筆すべきなのは、日本からの帰国後まもなく日中戦争末期にかけて、多数の日本の文学作品を翻訳したことである。以下に章克標の訳した日本の文学作品を挙げておく。

○章克標の訳した日本の文学作品

武者小路実篤「愛欲」―『愛欲』　上海金屋書店　一九二八年（一九二九年再版、初出『東方雑誌』第二三巻第一四号―一七号　一九二六年七月―九月）

芥川龍之介「藪の中」―「藪中」（『芥川龍之介集』　上海開明書店　一九二七年（一九二九年再版））

片岡鉄兵「立志」―「立志」（『東方雑誌』第二六巻第二二号　一九二九年十一月）

「ある結末」―「一個結局」（『小説月報』第二一巻第二号　一九三〇年二月）

横光利一「蛾はどこにでもゐる」―「到処有的蛾」（『東方雑誌』第二六巻第二四号　一九二九年十二月）

「春は馬車に乗つて」―「春天坐了馬車」（『小説月報』第二一巻第三号　一九三〇年三月）

『谷崎潤一郎集』上海開明書店　一九二九年一月

「刺青」―「刺青」

「麒麟」―「麒麟」

「悪魔」―「悪魔」（初出『東方雑誌』第二五巻第一九号　一九二八年十月）

「続悪魔」―「続悪魔」

「富美子の足」―「富美子的脚」（訳者　夏衍）

「二人の稚児」―「二沙弥」

『殺艶』上海水沫書店　一九三〇年三月
「お艶殺し」―「殺艶」
「蘿洞先生」―「羅洞先生」

『富美子的脚』（「富美子の足」）三通書局　一九四一年一月
『人面瘡』（「人面疽」）三通書局　一九四一年
『悪魔』（「悪魔」）三通書局　一九四一年

『菊池寛集』上海開明書店　一九二九年（一九三〇年再版）
「藤十郎の恋」―「藤十郎之恋」
「若杉裁判長」―「若杉裁判長」
「身投げ救助業」―「投水救助業」
「羽衣」―「羽衣」
「島原心中」―「島原心中」
「世評」―「公論」
「貞操」―「貞操」
「恋愛病患者」―「恋愛病患者」
「兄の場合」―「兄的場合」

『夏目漱石集』上海開明書店　一九三二年七月
「坊っちゃん」―「哥児」（初出『小説月報』第二一巻第七号―九号　一九三〇年七月―九月）
「倫敦塔」―「倫敦塔」（初出『金屋月刊』第一巻第四号　一九二九年）
「高浜虚子著『鶏頭』序」―「鶏頭序」

『日本戯曲集』上海中華書局　一九三四年
山本有三「同志の人々」―「同志」
中村吉蔵「星亨」―「星亨」
久米正雄「阿武隈心中」―「阿武隈心中」
小山内薫「第一の世界」―「第一的世界」
久保田万太郎「短夜」―「短夜」
岡本綺堂「修禅寺物語」―「修禅寺物語」

『北条民雄小説集―癩院受胎及其他五編』太平書局　一九四二年十一月
「いのちの初夜」―「生命的初夜」
「間木老人」―「間木老人」
「癩院受胎」―「癩院受胎」
「癩家族」―「癩家族」
「癩院記録」―「癩院雑記」

『現代日本小説選集』第一集　太平書局　一九四三年八月
横光利一「秘色」―「秘色」
丹羽文雄「開かぬ門」―「不開的門」
葉山嘉樹「海に行く」―「往海洋去」
中山義秀「山師」―「山師」

林芙美子「大学生」―「大学生」
火野葦平「山峡にて」―「在山峡裏」
舟橋聖一「枯木」―「枯木」
大瀧重直「解氷期」―「解氷期」
壺井栄「風車」―「風車」
荒木巍「幸運児」―「幸運児」
窪川稲子「鳩」―「鴿」
太宰治「きりぎりす」―「蟋蟀」
芹沢光治良「冬のはじめ」―「冬初」
宇野浩二「晴れたり君よ」―「日麗天和」
上田廣「冬の町」―「冬街」

『現代日本小説選集』第二集　太平書局　一九四四年四月
森三千代「安南」―「安南」
上田廣「地熱」―「地熱」
上田廣「雨季」―「雨期」
高見順「帰っての告白」―「帰来独白」
高見順「花さまざま」―「花種種」
芹沢光治良「春の記録」―「春之記録」
井上友一郎「竹夫人」―「竹夫人」
大谷藤子「或る女の話」―「某女的事」
舟橋聖一「木石」―「木石」
嘉村礒多「業苦」―「業苦」

③『訳叢』における翻訳作品の選択

雑誌『訳叢』に「蟋蟀」をはじめとして章克標（許竹園）による日本文学作品の翻訳が二十四作掲載されている。章克標はどのように日本作品を選択したのだろうか。彼の回想録である「世紀揮手」には、つぎのようにある。

在郭秀峰主辦的［譯叢］雑志上，我毎月要翻譯一篇日文小説，那時日本文学雑志及一般読物以及新的出版物，我們還有机会看到，就从那些書刊里挑選材料来譯。我的排選是采取回避当前政治的方針，凡是配合当時他們方針政策，為政治运動效労的東西，我竭力回避，只選些超越時代的，不太及時事的作品来選毎月一篇，后来結集起来，作為［現代日本文学選］由太平書局出版了。（『章克標文集』下　上海社会科学院出版社　二〇〇三年一月二〇八頁）

（郭秀峰の主宰した雑誌『訳叢』において、日本の小説を月に一篇翻訳した。当時、日本の文学雑誌や一般的な読み物及び新刊の出版物などは、われわれにはまだ入手できたため、これらの中から翻訳すべき作品を選んだ。私は当時の政治方針を回避する態度を採り、方針や政策に協力したり政治運動に奉仕したりするような作品はできるだけ避けて、時代を超えた、時事にあまり関わらない作品を毎月一篇選んで訳した。後に（それらの翻訳作品が）まとめられ、『現代日本文学選』として、太平書局から刊行された。（拙訳））

翻訳作品を選択する章克標の規準が政治の回避にあったことがはっきりわかるであろう。

④「きりぎりす」の選択について

「きりぎりす」は昭和十五年十一月発行の『新潮』に刊行され、語り手の「私」から夫の「あなた」に宛てた別れる手紙の形で書かれた短篇小説である。「私」は周囲の反対を押し切って無名の画家の「あなた」と結婚した。世間に認められない「あなた」を理解するのは「私」しかいなかった。ところで、去年、「あなた」が新浪漫派という団体を作り、その展覧会に「菊の花の絵」を出品して、周囲の賞賛を受けたことをきっかけに、「私」は「あなた」を非難し始めた。先日「あなた」の行った、新浪漫派の時局的意義についてのラジオ放送を聞いて、「あなた」に憎悪を抱くようになった、というような「あなた」と別れると決意する経緯を手紙に綴っている。

井原あやが「「あなた」と別れるということ—太宰治「きりぎりす」をめぐって—」(注一〇)において指摘しているように、「きりぎりす」に対しては同時代評が多い。その代表的なものを列記すれば、次のようである。

平野謙「混濁と希薄　作家精神の在りやう　文芸時評④」(『都新聞』　一九四〇年十月三一日)

作家精神の在りやうといふ点で私は太宰治の『きりぎりす』(新潮)を興味深く読んだ。ここにみられる反俗精神は、現在私どもでも伝へ聞く日本画壇のインフレ景気に対する風刺といふやうな素材的意味を超えてゐる。

鬼生田貞雄「作家と自覚　文芸時評」(『文芸首都』　一九四〇年十二月)

栄誉、名声、金銭を超えようとする気持ちと、それを欲求する気持ちとの争闘を、妻と夫とに別けて表現してゐるのだが、(中略)俗念に徹してしまつても、また悟念に徹してしまつても、いけないのが芸術家の生き方かも知れない。

高見順「反俗と通俗　文芸時評」(『文芸春秋』　一九四〇年十二月)

美しい反俗精神とも見られるが、そしてその女はそのつもりにちがひないが、実はそれは女の醜悪なエゴチズムの変形なのだ。エゴチズムの上に咲いた反俗精神、さう言つてもいい。(中略)男の俗物性を糾弾するなら、同様に女のエゴチズムも糾弾せねばならないと思ふ。

岩上順一「太宰治の一面」(『三田文学』　一九四一年二月)

「きりぎりす」の弱いがしかし真剣な、思ひつめて純粋な反俗精神となつて現はれてゐることに就いては、も早や説明するまでもないであらう。

参照して見ると分かるように、上記の同時代評は何れも反俗を

主題とした作品であると、「きりぎりす」を評価している。また、「きりぎりす」の発表された六年後の一九四六年に、太宰治は次のような「あとがき」を書き加えた。

「きりぎりす」は、昭和十五年の秋に書いた。このころ少し私に収入があつた。千円ちかい金がまとまつて入つたのではなかつたかと思ふ。そんな経験は私にとつてははじめてであつたので非常に不安であつた。結局それは、すぐに使つてしまつたけれども、しかし、自分もこんな事では所謂「原稿商人」になつてしまふのではあるまいかと心配のあまり、つまり自戒の意味でこんな小説を書いてみた。この小説発表の後で、あれは文壇の流行作家何某を攻撃したものだ、などといふ噂も起つたやうであつたが、私はそんな何某などを相手になどしてやしない。私の心の中の俗物根性をいましめただけの事なのである。（『太宰治全集』第十一巻　筑摩書房　一九九九年三月　三八八頁）

太宰治のこういう発言は「きりぎりす」における反俗をめぐる評価にさらに拍車をかけたと井原あやは考えている。その後も「きりぎりす」から反俗を読み取ろうとする論は枚挙にいとまがない。井原あやの話を借りて言えば、「平野の「反俗精神」という評価以来、時代とともに研究手法や切り口がいかに変化しようとも、今日に至るまで「きりぎりす」を分析する際には、妻の「反俗」であれ夫の「通俗」であれ、必ず「俗」であることが問われていた」。（井原あや「「あなた」と別れるということ―太宰治「きりぎりす」をめぐって―」『国文学　言語と文芸』第一二四号　二〇〇八年三月　八二頁。以下は頁数だけ示す）

一方、井原あやは前述した「あとがき」について、「これらの太宰自身による言葉、つまり〈自作自解〉は、先の同時代評―「反俗」をめぐる評価を受けた後に発せられたものであるということである。ここに、同時代評で挙げられた「反俗精神」に接続する、「原稿商人」「自戒」「俗物根性」といった〈作者の言葉〉を言わせてしまう同時代評の力学とでも言うべきものが働いていたと見ることは出来ないだろうか。また、同時代評と〈作者〉との間に作用する力学が、同時代評に理想的な形で応答した〈理想的な作者〉の姿を生み出したと言えはしないだろうか。」（八一頁）と述べた上で、「きりぎりす」の発表された昭和十五年という時代に目を向け、作中における幾つかの論拠を挙げ、「反俗」に画一化された評価を覆した。

昭和十五年は神武天皇即位から二六〇〇年目にあたる「紀元二六〇〇年」という祝祭の時であった。こういう時代状況の中で、主人公の「あなた」は「新浪漫派」という新団体の最初の展覧会に「菊の花の絵」を出品し、周囲から好評を博した。桜が兵士を表象していたのと同様に、菊の花が天皇の表象であることは周知の通りである。特に、「紀元二六〇〇年」という祝祭の時における「菊の花」は祝祭装置として機能している。「私」の「あなた」への非難とは、「紀元二六〇〇年」を前に、祝祭装置へと回収される「菊の花の絵」を描いてしまう「あなた」への嫌悪と読める、という考えを井原あやは示した。

井原あやの挙げた、もう一つの論拠は結末に出てくる「ラジオ放送」である。「周知の通り、すでに戦中からラジオ、あるいはラジオ放送とは「放送は実に一億国民を一瞬にして抱擁し、これを同一の思考と感情の響の中に置く国民指導の近代的な武器である」と共に、戦時下にあつては姿なき大砲である」と目されていた。そのような国家宣伝装置としてのラジオから放送される「あなた」の声は、もはや「私でなければ、わからない」ただ一人の「あなた」の声ではなくなったのだ。」（九一頁）というように、井原あやは指摘した上で、「「あなた」とは極めて〈紀元二六〇〇年〉的な〈国民〉表象であり、その「あなた」と別れるということは、「私」にとって、そうした〈国民〉に同化することへの拒否に繋がるということが出来るだろう」（九三頁）という結論を出した。

つまり、「きりぎりす」は反俗的というよりむしろ、反時局的と言ったほうが妥当であろう。

ところで、訳者の章克標は日本の同時代の評論家と同様に、「きりぎりす」を反時局的作品ではなく、反俗的作品と捉えたようである。反俗は目下の政治方針を回避し、時事と関わりのないという条件を満たすので、それを翻訳したのではないか。

また、先に述べたように、同時代評は何れも反俗を主題とした作品であると、「きりぎりす」を評価している。章克標自身が「当時、日本の文学雑誌や一般的な読み物及び新刊の出版物などは、われわれにはまだ入手できる」（那時日本文学雑誌及一般読物以及新的出版物，我們還有机会看到）と言っている。一方、『訳叢』に掲載された翻訳はほぼ初出雑誌に拠った。『文学界』、『文芸』、『中央公論』、『日の出』、『新潮』、『婦人公論』、『改造』、『文芸春秋』、『日本評論』、『不同調』、『知性』、『週刊朝日』、『雄辨』などの雑誌が数えられる。つまり、当時、章克標にはこれらの雑誌を読む機会があった。おそらく上記の同時代評が載っている『都新聞』、『文芸首都』、『文芸春秋』、『三田文学』などの雑誌も入手できたであろう。雑誌における「きりぎりす」に関する同時代評を読んで、「反俗」という評価をそのまま信じて、それを翻訳した可能性もあるであろう。

⑤太宰治作品の中国における翻訳

「きりぎりす」―「蟋蟀」　章克標訳（『現代日本小説選集』第一集　太平書局　一九四三年八月）

「斜陽」―『斜陽』　張嘉林訳　上海訳文出版社　一九八一年八月

「ヴィヨンの妻」―「維栄的妻子」　張嘉林訳（『当代日本小説集』上海訳文出版社　一九八六年）

「人間失格」―『喪失為人資格』　王向遠訳　北京師範大学出版社　一九九三年

『外国優秀小説選粋―「斜陽」他』　山東文芸出版社　一九九九年

「走れメロス」―「社会迷霧中的世態心霊図」　楊偉訳
「魚服記」―「魚服記」　許金龍訳
「満願」―「満願」　唐先容訳
「富嶽百景」―「富岳百景」　晋学新訳
「桜桃」―「桜桃」　趙戈非訳
「ヴィヨンの妻」―「維栄之妻」　楊偉訳
「斜陽」―「斜陽」　晋学新・穆麗琴訳
「人間失格」―「喪失為人資格」　楊偉訳

『斜陽』　重慶出版社　二〇〇八年九月
「斜陽」―「斜陽」　張嘉林訳
「ヴィヨンの妻」―「維庸之妻」　楊偉訳
「人間失格」―『人間失格』　楊偉訳

まとめ

章克標は、同時代評を読んだかどうかはともかく、実際に反時局的な作品である「きりぎりす」を反俗的な作品と思い込んで、「目下の政治方針を回避する」という翻訳作品の選択条件に該当するため、それを「蟋蟀」に翻訳したと言えるであろう。

太宰治はこの「きりぎりす」の漢訳や章克標についてまったく言及していないため、章克標による「きりぎりす」の漢訳を知らなかった可能性が高いであろう。つまり、中国人に読んでもらうために書いた「竹青」と「惜別」の漢訳（発表予定は昭和二十年）は何れも幻に終わったが、昭和十七年に「きりぎりす」がすでに章克標によって漢訳された。そしてこれが太宰治作品の漢訳の嚆矢であると推測される。

【注記】

（注一）『太宰治全集』第七巻　筑摩書房　一九九〇年六月　四四八頁。

（注二）山内祥史編「年譜」（桂英澄編『太宰治研究Ⅱその回想』筑摩書房　一九七八年六月　三八八頁）。

（注三）『上越教育大学国語研究』第四号　一九九〇年　四八頁。

（注四）「日本文学報国会編集「大東亜文学」―戦時下における日中文化交流の一風景」（杉野要吉『淪陥下北京一九三七―四五―交争する中国文学と日本文学』　三元社　二〇〇〇年六月　三七五頁）所収。

（注五）復刻版『文学報国』不二出版　一九九〇年十二月十日　一六頁。

（注六）復刻版『文学報国』不二出版　一九九〇年十二月十日　一六頁。

（注七）復刻版『文学報国』不二出版　一九九〇年十二月十日　一六頁。

（注八）復刻版『文学報国』不二出版　一九九〇年十二月十日　九一頁。

（注九）大澤理子「〝淪陥期〟上海における日中文学の〝交流〟史試論―章克標と『現代日本小説選集』―太平出版印刷

公司・太平書局出版目録（単行本）」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第九号　二〇〇六年四月　七五頁を参照した。

（注一〇）『国文学　言語と文芸』第一二四号　二〇〇八年三月。